

## は し が き

この研究報告は、当教育センター科学教育部員、理科長期研修員、地区理科教育センター専任所員の昭和58年度の研究成果をまとめたものである。

今日、理科の学習において従来よりも増して強調されていることは、生徒自らが意欲的に調べたり考えたりする学習活動の推進です。生徒が自然の事物・現象に興味・関心を持ち、主体的に学習をするためには、実験や観察を通して直接自然に触れさせることが不可欠の条件であります。そして五感を通して自然と触れ合う中から問題意識が生まれ、活動が持続し、ひいては豊かな自然観が育成されるものと考えます。

そのためには、まず教師自らが身近な素材を十分に研究し、その教材化や生徒の実態に合った提示法の研究が重要であり、課題でもあります。

このような考え方に基づいて、当教育センターでは従来から授業実践を取り入れた実践研究を行うと共に、素材の研究や指導上の問題点の解明を行ってまいりました。そして、その成果を実践研究集録や研究報告としてまとめ、紹介してまいりました。

この研究報告第68号には、今年度行われたそれぞれの地域や身近にある素材の研究、実験材料・実験方法を工夫した教材開発を中心とする研究などがまとめられています。これを一読されて教育実践に役立てていただければ幸いです。また、これらの研究報告の中には引き続き研究を要する内容のものもあり、また研究の進め方や結論の導き方に不十分なものもあるかと思えます。お気づきの点がありましたら率直なご指導とご批判をいただければ幸いです。

最後に、これらの研究にあたり、ご助言や便宜を与えてくださいました各位に対し、厚くお礼を申し上げます。

昭和59年3月

新潟県立教育センター所長 陶山正和